

岩佐 富雄さん

岩佐溶接鉄工所（岐阜県）



は次のようなものだ。

岐阜にいた登一さんが溶接を学んだのは大阪の職業訓練校。覚えるのが早く、実習を終えると他の実習生の分までこなし、1年の力

ある故・岩佐登一さん
に大きな影響を受けてきた。家業を手伝い、中学生になると、出張仕事にも同行する。ここの交わりの中で、溶接技術を、そして生き方を学んだ。

岩佐さんが見聞きした登一さんの溶接人生が、日曜なので誰もい

ない。そこで、普段から横で見ている溶接を自分で行うと、客が喜んでくれた。「日曜日なら溶接ができる」。以降は日曜日には溶接

仕事を待つようになり、時に顧客に技術を教わりながら、溶接の仕事などを覚えていった。

ある日曜日。溶接の仕事が舞い込んできた。日曜なので誰もい

社とは交流が続いている。

「溶接の看板をあげているのだから、どんな溶接でもできないとアカンぞ」。登一さんは常々そう言っていたという。だから難しい溶接の仕事も断らずに受けてきた。加工方法がわからない時は様々な工法を試しつつ、

「そんな親父に、くつついていたもんだからね。生まれながらにして溶接をやっていたような感じ」。岩佐さんはそう言って笑う。登一さんが岐阜に戻って岩佐溶接鉄工所を創業してから、その会

溶接を極める。その流れは、まもなく三代目となる将徳さん(39)にも受け継がれている。将徳さんは、高校生

の時に全国溶接技術競技大会（第44回長野県大会）に出場したことがあるほどの技量を持つ。第61回大阪大会には、富雄・将徳の親子で出場している。

そんな溶接一家で受け継がれる溶接技術の要諦は何か。将徳さんは「プール（溶融池）がどこまで見えているか」と回答する。そうした技術の勘所も含め、地元高校での技術